

第1回里山勉強会

パネラーとして

金親 博榮

2 - 1 自己紹介

住所・里山活動の場所、自己所有の田畑山林を、谷当グリーンクラブが利用。発足して12年、60家族が会員、現在代表を勤めています。会員以外の参加もOK。

会社勤め21年で退社、田畑山林管理に専心。今日の肩書きは、千葉市森林組合副組合長という立場と、里山団体の関係者としての双方を兼務。

配布したパンフレットに基づき、活動内容を、説明。

2 - 2、地主は、市民との交流について、どう考えているか。

活用されていない山林、農地を、市民との交流の場として利用する事については、基本的には、了承される事である。その条件、心情は、

国民的な要望に応えるという美名に、理解は示すが、当座の収入にならない事に、かかずらっては居られない。

交流は、面倒だ。発生する権利、義務の重さと、獲得できるもの(収益や楽しみ)を比べ、損が大きいと感じている。

交流の糸口がない。これは、市民側からも、いえる事か。

なぜ、地主にばかり、「かくあるべし」を求めるのか。それとも、単に、地主が市民に求めているから、一方通行になってしまっているだけの事か。

昔から、都市の問題の多くが、田舎の役周りによって、解決されてきた。いわゆる南北問題は、北・都会対南・田舎という図式で、この里山問題でまた、同じ轍を踏む事となるのか。

市民による荒れた里山、里地の管理作業に対しては、地主は、感謝の念を抱くが、その作業による反対給付の要求には、拒否反応。

市民側からは、各自の願望を満たす場と機会の提供に感謝し、地主は、その善意に根ざす行為に感謝する。お互いの感謝の気持ちが、基礎として、不可欠だ。

2 - 3 市民農園の開設について

ここでは、一般的に利用されている畑の市民農園についての疑問に答えさせていただきます。

1、 農地の市民農園利用

少なからぬ農家は、農耕作業に喜びを感じていない。勿論、農業生産で、高い収益を上げている農家もあるのだが、一般的ではないので、社会的な問題となっている。

農地を保有し、農業によって現在将来ともに生計を立てていこうとしている者にとって、

特に生産緑地には、市民農園は、基本的には、土地賃貸と同様の結果となる市民農園の開設は、法的にも許されない。又、それ以外の市街化区域内の土地は、収益面からすれば、安価な市民農園の開設で、手間が掛かり、土地利用の自由を拘束されるよりは、フリーハンドの、他の用途が好ましいと考える。

一方では、市民農園の開設に否定的であった地主にも、信用のできる代表者が居り、熱意ある利用者があれば、開設に動く事もある。地主の心理的な壁を取り除く行動を示す事が道を開くものである。

市街化調整区域ないしは無指定の農地については、空閑地や、荒れた土地となっていてところが、急激に増えている。処置に困っている例は、枚挙にいと間なし。

この2者の間を埋める事ができる努力と、人の存在が求められている。これまでの、補助金行政では、不得手とする分野で、人やソフトの必要性が高い。西欧諸国での例の通り、私有地に頼るのではなく、公有地での、農園開設の方向も、大いに有効である。

私事ですが、市民農園の開設については、地主、利用者、学者、行政の各々の立場の人たちが集まった「ちばけん市民農園協会」にその発足時から参加して居ります。

このほど、その集大成とも言うべき出版物がまとまり、一般書店での販売を始めた所で、来週の土曜には出版記念会を開きます。書名は「市民農園のすすめ」としました。これには、その歴史と各種の機能、各国の実情、開設のノウハウ等を盛り込み、市民農園のバイブルを作ったものと、自負しています。

2 - 4 林業以外に、山を利用していく方法は考えられていないのか。

結論を言えば、大多数の地主にとって、いい考え、方策が見つかっていないのが、実情。ここで云う林業は、山林という地目の土地を利用し、木材生産、シイタケ等の林産物の栽培を行う、在来型の林業を指しているものとする。

特にこの数十年間、山は、住宅地に、工場用地に、そしてゴルフ場に改変、開発されてきました。今ここに来て、ぱったりとストップし、その負の側面が、クローズアップされてきたのです。

この産業が窮地に陥り、その継続的な生産、経済活動が止まってしまうという危機的な状況です。これを、外から見れば、里山を含む森林の荒廃が起きているという事です。経済的単位として成立しない産業分野というものは、ナンセンスです。まずは、遊びや、趣味の相手、道楽ではなく、本来追求すべき産業施策が必要です。

そこで目下、多面的な利用、観光、医療、福祉から、教育、文化、生物、国土環境、海洋の保全にいたるあらゆる林業の効用を、再評価し、推進する道を探っている所です、在来の林業としての役割と並行して、研究、実践される事が、必要です。

これらの中に、持続可能な森林経営の道を探らざるを得ないのが現状です。

大気中の炭酸ガスの吸収源、よい景観の提供、地下水の涵養などを含め、都会と田舎を問わない、国民的な広い関心と、守り育てる行動が、今まさに必要となっているという事であろうと思います。

2 - 5 地主がなぜ、市民に土地を開放したらないか。

最近、私の里山活用に一つとして利用している、キャンプ場には、不本意ながら、次のような、看板を、建て、「トラブルの予防に努めなければいけないかな」と思わせられた事が有りました。

この一帯の土地は、全て私有地です。区画ごとの境界、所有者の表示はありませんが、あなたの物でない土地には、無断で入らないで下さい。

勿論、一木、一草たりとも、取ってははいけません。取れば、盗人になってしまいます。あなたの、要らないもの、ゴミは、当然捨てては、はいけません。

結果的には、道路以外には、立ち入れない事になります。

もし自分が地権者でない土地に立ち入りたいのなら、地権者の了解を取ってください。あなたの家、庭と、同様です。

田圃のあぜ道にも、地権者がいます。たとえ、公共の所有に属する部分としても、維持管理は、農家が分担し、土地それぞれに、目的、役割があります。

ですから、多人数で、畦を歩けば、壊れてしまい、水の流出を招く事にもなりかねません。歩く事が、壊す事となってしまいます。

自然観察のリーダーの方がたへの注文

珍しい植物、昆虫の説明は、絶対に口にしないで下さい。いずれ、持っていかれる糸口を、作ってしまわないように。

誤解を招かぬために、一言、

現在携わっている、又これまで携わってきた、里山活動をする市民の方々の大多数の方々は、地主からも、評価される方々であると云えます。ほんの一部のボランティアとの行違い、里山に携わる都市住民と、接触した事のない地主からすると、面倒な事、いやな事は、遠ざけたいと考える対象になってしまっていて、いるだけなのです。

2 - 6 森林が、活用されていない理由

木材の価格は、杉丸太は昭和31年その他も40年代の価格と同じです。40年も前の価格と同じという事です。この頃の月給は2~3万円といった所です。

国産材の自給率は18%。

直径20cm長さ4mの杉の木を、山から伐採し、運び込んで、市場のコンクリートに並べて、1本150円です。この値段では、人件費はただとしても、道路を運搬してくる経費にも足りないという事です。これまでに、育てるには20年から30年は必要なのです。ですから、間伐も進みません。木材を売ったことのある林家は7% 林業の平均年収は21万円。

価格の安い理由には、これまた、たくさんの理由があります。

安い材の輸入問題、同一規格の大量の材が揃わない、高級な木材の需要が少ない等々、理由には枚挙に暇がありません。悪循環そのものです。

結果的には、植林、維持、管理しても売上では回収できない。地主は、霞と夢を食って生きていく訳にはいかないのです、山から離れる結果となる。

こんな訳ですから、林業の雑誌には、「木材の販売でこんなに稼いだ」という類の欄は存在しません。現在は、地主の山林の作業は、殆どが、無償を越えて、国土の美化に対する奉仕作業と言っても過言ではありません。

ネガティブな事ばかりを、あげつらっても、仕方ありません。・今日は、里山という新しいフロンティアに立ち向かう為に集まっていますから。